
最期の晩餐

羅幻徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最期の晩餐

【Nコード】

N1435K

【作者名】

羅幻徒

【あらすじ】

夫の帰宅を待ちながら姑の嫌味を受け流す妻。待ち切れずに夕食をと催促された妻は、特別な料理を義親に饗する。

不況のご時世で仕事が忙しいというのは、ある意味では良いことなのかも知れない。

だけど家庭を預かる主婦としては、これがなかなか大変なこと。多分、同業者でなければ判らない悩みだろう。

夜も更けたというには早いものの、朝の早い年代には眠気を催すに十分な時間。

「静香さん、稔明はまだ帰ってこないのかしら？」

この世の終りのような苦悶を眉の間に浮かべているのは、夫の母……つまりは姑だ。それが年甲斐もなく唇を尖らせて、駄々をこねるように時計を見上げている。

「こんなに遅いなんて……もしかしたら、途中で事故にでもあつてるんじゃないだろうね？」

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。残業で遅いだけですから」結婚する前は、私も同じ職場で働いていた。時季的にどんな職務が与えられるか、就業時間や労働状況がどんなかは、大抵の予想がつく。しかも、夫は夜遊びをする人間じゃないうえに友達も少ないので、誘われて飲みに行くようなこともない。何が楽しいのか判らない、会社と家の往復生活。

だから、心配はいらないのだが——そんな”常識”は、姑の干からびかけた脳みそにはあるはずもなかった。遊び心も面白みもない真面目が服を着ただけの夫は、母親にしてみれば出来のいい孝行息子。案の定、然程心配を見せない私にきつく眉をしかめて見せている。

「心配じゃないって云うの！？ 軽々しく判った風な口を利くんじやありませんよ」

そして続く、バカの一つ覚え。

「まったく、何て冷酷な嫁なんだろうね」

もう、耳にタコができたわ。

そんな姑の癩癩も何処吹く風、今度は舅が私を見上げてくる。

テレビの前に寝転がり、そのまま首だけを巡らして私の方を向く。気付かれていないかと思っているのだろうが、その視角を作ること、ソファ―に座った私の膝頭を拝むことができるのだ。私が膝上のスカートを穿いていれば、当然その先に映るものは決まっている。

定年退職したこの男は、一日中こんなことしか考えていない。そう云えば、その息子も暇があればアダルトビデオを見ているような人間だわ。

「静香さん、お風呂はまだかな？」

動かなくても垢は溜まるものね。そんなことを億尾にも出さずに私はにっこりと笑って立ち上がって、風呂場へと足を向けた。

それを追って、姑が声をあげる。

「まだ用意もしてなかったの？ 何て気の利かない人かしら」

既に支度はできている――と、結婚当初なら反論の手間を惜しむこともしなかった。けれど、もうそんなことは無駄だと判りきっている。姑は、他人の話など聞く気もない。自分の都合だけが、彼女の法律。そして、その姑との生活を半世紀近くに渡って続けてきた舅も、まさしく同類だ。息子もまた彼等と同等の人間なのだから……遺伝子の脅威は、決して医学界だけの専売特許ではない。

「バスタオルと下着の用意しておきますね、お義父さん」

脱衣所に、厭味なほど奇麗に畳まれた下着とバスタオルを。あなたの妻ではできないほどの、器用さで。

そんな思惑など、判るはずもないでしょうけれど。

結婚を申し込まれた時、同居なんて一度も口にはされなかった。

当時はまだ夫の姉、つまりは小姑が家に居たから、さすがの姑も少しは遠慮をしたのだろう。別に部屋を借りて、二人でのんびり新婚生活を楽しみなさいとまで云っていたのだから、今とは何と雲泥の差だろう。

ただ当初は、出産を強く仄めかした言葉が多かったのを覚えている。早く孫の顔を見たいとか、時には私の生理日まで気にかけていた。だからこそ、私が母親になれない躰だと一早く気付いてしまったのだらうけれど……そんな勝手な期待を押し付けてきた彼女の罪は、責めるだけバカを見る。

とにかく、小姑が家を出てしまった現状が、私に予定外の家族をもたらした。

勿論、ゆくゆくは面倒をみなくてはいけないと思っではいたけれど、その予定がとにかく早過ぎた。管理費を払っていた部屋は、一度も家具を入れることなく売り払われ——その変わりに得たのは、築三十年の古びた一戸建てと憎まれ口を吐き続ける大荷物だけなのだから、貧乏クジもいいところ。

続けるはずだった仕事も辞めさせられ、買物でさえケチを合図に送り出される。クラス会さえ断り続けて久しいほどで、実家の両親さえ解せない親不孝を責める始末だ。

相談相手にさえならない夫は、仕事さえしていれば役目を果たした顔をしている。残業でもしようものなら、国家の一大事を担った顔で胡座をかく。ここまで愚かな男だったのかと、見抜けなかった自分に何度齒噛みをしたことだろう。

どうして私は、こんな結婚を選んってしまったの？

そんな自責を呑み込む変わりに包丁を振るっているなんて、多分誰も気付いてはいない。

それは、私だけの秘密でもある。

舅の欠伸が頻繁になった。時計を覗くと、そろそろゴールデンタイムも終了の時刻。

「まだ飯は食べられんのかな？」

「ほら、静香さん。さっさと食事の用意をしてちょうだいな！」

息子の帰宅を待つと云ったことなんて欠片も憶えていない声が、私の耳を刺した。

急いでテーブルを整えて、さっさと椅子に座った舅に箸を渡している。

「あら、またお肉なの？ 年寄りがこんなものばかり、食べられる訳ないじゃないの」

やたらと疎ましい表情を作った姑が、のろのろと席に就く。

昼間は婦人会だお稽古事だと暇に任せた生活をしているのに、何故か食事だけは作ろうとしない。いや、食事だけでなく、家のこと全般をする気がないのか、自分達の寝室の掃除さえしようとはしないのだ。文句だけは人の三倍は云ってくるのだから、元気なのにもほどがある。

「コレステロールだって溜まるじゃないの。私達のこと、何も考えちゃいないんだから」

コレステロールの意味も判らないくせに。

だけどやっぱり、私はここでも反論を呑み込んでしまう。仕方ないでしょう？ バカには何を云っても通じないんだから。説明するだけ時間の無駄よ。

「でもね、お義母さん」

私はいつもより自然に笑って見せながら、彼女に箸を手渡した。それでもブツブツと文句を云い続ける彼女に、もう一度微笑みかける。

「このお肉は特別なんですよ。お義母さんも絶対気に入るはずですよ。珍しく断言した私に、二人が奇妙な顔を見せた。

いつもなら適当に逸らかすだけだものね。普段から従順じゃないとはいえ、だけど奇異な反応なのは確かだろう。

でもこれは、本当にあなた達にお勧めのメニューなのよ。食べてみれば、すぐに判るわ。

私はもう一度、にっこりと微笑んだ。

そうして啜え慣れてる部位の肉を、殊更美味しそうに頬張って見せた。

（後書き）

ご精読アリガトウございました。

ご意見・ご感想・ツツコみなどは遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1435k/>

最期の晩餐

2010年12月31日22時41分発行